

# 公共図書館における「読み聞かせ」を担う職員の意識

水谷 亜由美 中村 哲也  
濱千代いづみ 藤田万喜子

キーワード：読み聞かせ、公共図書館、職員、子育て支援

## I はじめに

本稿の目的は、本学近郊の公共図書館における「読み聞かせ」に携わる職員のインタビュー調査を通じて、図書館職員が考える「読み聞かせ」の展望について紹介することである。

乳幼児期の読み聞かせは、言葉の力や想像力の育ち、人間関係の形成につながる活動として重要視されている。日本では、2001年にブックスタート<sup>1)</sup>の活動が始まり、乳児期からの読み聞かせを通じた大人とのコミュニケーションが重視されるようになった。さらに、家庭以外でも就学前施設、学校や子育て支援センター、書店などでも「読み聞かせ」が実施されている。読み手は保育者や教師、保護者や地域のボランティアなどと広がり、家庭と社会的な活動の双方が影響しあいながら発展しているのが昨今の特徴といわれている<sup>2)</sup>。保育の場においては、領域「言葉」に絵本とのかかわりが示され、子どもの言語の発達をはじめ、知的な発達を促す文化財として活用されている<sup>3)</sup>。保育者と子どもとの共有体験の場、生活とのつながりを生む場として、読み聞かせの意義が見出されている<sup>4)</sup>。また、学校での読み聞かせにおいては、聞き手の子どものみならず、教師やボランティアにとっても意義があり、読み聞かせ時間外の関係性にも影響があるといわれる<sup>5)</sup>。

では、乳幼児期の子どもたちが読み聞かせを経験する場の1つである図書館での活動には、どのような意義や課題があるのだろうか。聞き手の態度は、読み手がどのような意図で視線を送るかによって異なると指摘されているが、読み手あるいは主催者側の意識が子どもたちにも伝わり、子どもの育ちにもつながると考えられる。そこで本稿では、読み聞かせの運営や読み手として携わっている職員のインタビュー調査から、図書館での「読み聞かせ」の意義や課題について紹介し、主催者側からみた乳幼児期の「読み聞かせ」について検討を行いたい。

## II 方法

### 1. 調査及び分析方法

調査は、2019年9月～2020年2月に、子どもの読書活動を推進し、ブックスタートや読み聞かせ活動に積極的な取り組みを行っている本学近郊4つの公共図書館で行った。各図書館で読み聞かせ活動に携わる図書館職員とボランティアに書面及び口頭にて、予め設定した同一の質問をし、回答を得た。設問は、読み聞かせ活動の概要(5質問)、「読み聞かせ」の準備・運営について(7質問)、「読み聞かせ」の意義と課題(4質問)についてである。なお、本稿で扱う「読み聞かせ」は、絵本の読み聞かせに限らず、紙芝居やエプロンシアター、パネルシアター、素話(語り・ストーリーテリング)などのおはなし、わらべ歌・子守り歌、手遊び・身体遊びなどの活動を含む。

実施にあたり、岐阜聖徳学園大学研究倫理審査委員会における承認を得ている。図書館の館長と読み聞かせの担当者に文書と口頭で説明し、同意を得た上で実施した。

本稿では、図書館職員の回答に着目し分析した結果を報告する。得られた回答の内、①「読み聞かせ」で心掛けていること、②読み聞かせ活動の意義、③子どもの様子や活動の変化、④今後の課題について考察した結果を報告する。なお、書面による回答の引用は、そのままの表記とした。

### 2. 図書館の概要

#### (1) 岐阜県図書館 (以下「岐阜県」)

「岐阜県」の乳幼児向けおはなし会、幼児・小学校低学年向けおはなし会、ともに1995年から実施されている。新館開館時に日曜日のおはなし会を計画・運営するボランティアをおはなしサポーターとして募集し開始された。乳幼児向けおはなし会の読み手は職員、幼児・小学校低学年向けおはなし会の読み手はボランティアが行っている。

#### (2) 大垣市立図書館 (以下「大垣市」)

「大垣市」の「おはなしの時間」は1980年から始まった。1979年に現在地に図書館が開館し、読書サークルが結成された。図書館の依頼により開始されている。読み手はお話の会『大きな樹』である。乳幼児とその保護者を対象としている「おひぎでだっこ」は2007年から、ブックスタートのフォローアップ事業で始まった。読み手は読み聞かせ指導員が行っており、指導員はブックスタートにも携わっている。

#### (3) 各務原市立中央図書館 (以下「各務原市」)

「各務原市」の「よみきかせ」は1992年から行われている。1991年に中央図書館が開館し、読み聞かせボランティアを募集し育成したことがかかっている。読み手は、図

書館で育成されたボランティアとなっている。

#### (4) 羽島市立図書館 (以下「羽島市」)

「羽島市」の「おはなしひろば」は1990年に現在地に開館し、子どもの本を読む会に依頼したところから始まった。読み手は「読み聞かせの会」のボランティアである。「赤ちゃんタイム」は2015年から、乳幼児の子育て世代が気兼ねなく来館できるよう、また保護者同士の交流の場となることもねらいとし開始された。読み手は「読み聞かせの会」のボランティアと同様である。ボランティアは2007年から始まったブックスタート事業でも活動している。

以上のように、「大垣市」の読み聞かせ活動が1980年とやや早く、他の図書館は1990年代に始まっている。この読み聞かせ活動は「大垣市」・「各務原市」・「羽島市」で現在地での図書館の開館が契機となっている。

対象を乳幼児に特化した読み聞かせ活動が、現在、「大垣市」・「岐阜県」・「羽島市」で行われているが、その開始時期は館によって異なる。「各務原市」の場合、読み聞かせ対象の区別をしていないが、ウィークデイの参加者は乳幼児である。「大垣市」・「羽島市」にはブックスタートとの連携や関連が見られる。また、読み手は全館ボランティアがかかわっている。乳幼児を対象とする読み聞かせには「大垣市」で読み聞かせ指導員・「岐阜県」で職員があたっている。

### 3. 調査協力者の概要

本調査では、「読み聞かせ」に携わる「岐阜県」の職員8人、「大垣市」の職員1人(代表者)、「各務原市」の職員2人、「羽島市」の職員1人の計12人から回答を得た。調査協力者の内、経験年数の1年未満が2人、1～5年が3人、6～10年が1人、11～20年が3人、21年以上が3人であった。

## III 結果と考察

### 1. 「読み聞かせ」で心掛けていること

「読み聞かせを行うにあたって、心掛けていることはありますか。」という質問に対して、各館の職員全員から回答を得た。ただし、「羽島市」の職員からはこの質問に対してボランティアに委ねている旨の回答があった。「羽島市」では職員が読み聞かせの環境整備、参加者への周知など行政に関する事柄を主として担当している。読み聞かせに使う題材選び、プログラムの構成、読み聞かせの実践は開館当初から携わっているボランティアに任されているからである。それゆえ、ここでは3館の職員の回答を整理す

る。回答内容に即して、(1)「読み聞かせ」の実践にあたって、(2)「読み聞かせ」の環境づくり、(3)子育て支援としての図書館の3項目に整理し、分析する。なお、インタビューに対する回答を引用する際、館名を添える。

## (1)「読み聞かせ」の実践にあたって

### ①「読み聞かせ」の事前準備

「読み聞かせ」の事前準備に関わる回答が2件あった。

- ・事前に何度も読む練習をする「岐阜県」
- ・絵本と絵本のつながり「岐阜県」

前者は事前に練習を重ねるという内容で、読み手として技術を向上させようとする意欲がうかがわれる。後者は読み聞かせで使う絵本相互のつながりを考慮したものである。事前に選書が行われるが、実施中にも聞き手の反応や進行状況による選書があると推定される。「岐阜県」では、おはなし会の当日に読み手の職員は打合せと練習を行っている。それがこの回答に反映している。

### ②「読み聞かせ」の実践中

「読み聞かせ」の実践中に関して多くの回答を得た。それらを内容に即して技術面から[表情]、[読む声の大きさ、速度、明瞭さ]、[本の持ち方、見せ方]、[聞き手(子ども)の反応観察]という項目に分類し、心理面から[読み手が楽しむ]、[好きな絵本を聞き手に伝えたい]という項目に分類する。

#### i) 技術面

[表情]に関わる回答が1件あった。

- ・笑顔で行う「各務原市」

[読む声の大きさ、速度、明瞭さ]に関わる回答が2つの図書館で計7件あった。

- ・大きな声でゆっくり、丁寧に読む「岐阜県」  
(同様の回答が「岐阜県」で計4件あった。)
- ・声が届くように、声の焦点が会場の奥になるように意識をしている「岐阜県」
- ・しっかりと届く声ではっきりと発声することなど「各務原市」
- ・全ての子が(みやすいように、)聞きやすいように心がけています「各務原市」

読み聞かせを担う職員たちは、「声が届くようにする、ゆっくり丁寧に読む、はっきりと発声する」ことを心掛けている。この項目は職員たちに重視されている様子がうかがわれる。

[本の持ち方、見せ方]に関わる回答が2つの図書館で計4件あった。

- ・鏡を使って、絵本がどのように見えているか確認する「岐阜県」
- ・全ての子がみやすいように、(聞きやすいように)心がけています「各務原市」
- ・子どもたちの様子を見ることができるよう持ち方、本の高さを配慮している「岐阜県」
- ・目線がぶれないようにするため絵本を動かさない「岐阜県」

子どもにどのように本が見えているかを推量しつつ、本の持ち方、見せ方を模索する様子がうかがえる。

[聞き手(子ども)の反応観察]に関わる回答が7件あった。

- ・子どもたちの反応を見ながら読む「岐阜県」  
(同様の回答が「岐阜県」で計3件あった。)
- ・読んでいない時は聞き手の様子に目を配る「岐阜県」
- ・掛け合いすると楽しい絵本の場合は、聞き手の様子をよく見ながら読み進める「岐阜県」
- ・聞き手との掛け合いが不要な、ストーリー重視の絵本の場合は、画面から目を離さない「岐阜県」
- ・退屈しているようなときは、アドリブで注意を惹く「岐阜県」

自分自身が本を読み聞かせている時は聞き手である子どもたちの反応を確認しながら読み、他の職員が読んでいる時は聞き手の様子に目を配っている。聞き手との掛け合いの有無によって視線を変えている。聞き手の反応に応じてアドリブを入れることもある。この項目はすべて「岐阜県」の職員の回答である。これは、乳幼児向けおはなし会の読み手を職員が担当しているという活動形態を反映している。

## ii) 心理面

[読み手が楽しむ]という回答が「岐阜県」「大垣市」「各務原市」で各1件、計3件あった。

- ・読み手自身が楽しむこと。心を込めていると、子どもにも伝わります「大垣市」

[好きな絵本を聞き手に伝えたい]という回答が1件あった。

- ・自分が好きな絵本であることが伝わるとよいなと思いつつ読んでいる「岐阜県」

読み手自身が読み聞かせをすることを楽しみ、思い入れのある絵本を読み聞かせを通じて伝えたいと願っている様子がうかがえる。職員の熱量が聞き手に届くことを確信している様子もうかがえる。

## (2) 「読み聞かせ」の環境づくり

「読み聞かせ」の環境づくりに関わる回答が3件あった。

- ・場の空気感・雰囲気づくり「岐阜県」
- ・読み聞かせがしやすい環境に心を配っています（大きな声、走り回る子への対応など）「大垣市」
- ・完璧でなくても、穏やかでおっとりとした雰囲気「大垣市」

各図書館では読み聞かせを行うコーナーを設け、保護者と子どもたちが一定の人数入ることのできるスペースを確保している。ある程度の閉鎖性がありながら、開架とのつながりを保つスペースである。そのスペースの雰囲気を読み手と聞き手が共有し、保持できるような穏やかで静かな環境づくりに配慮している様子が見えてくる。

## (3) 子育て支援としての図書館

読み聞かせで心掛けていることとして、「大垣市」は子育て支援としての図書館の在り様に言及している。

- ・「お母さんの声」を大切にしたいと願っています。お母さん自身が読み聞かせをすることで穏やかにほっこりとして欲しいし、それが大切であると伝えたいと思っています「大垣市」
- ・童謡、わらべうたは、上手でなくてもいい、お母さんが歌って聞かせることが重要なのだと、伝えたいため、家でもやってみようと思えるよう心がけています「大垣市」

図書館における読み聞かせに参加したお母さんたちに、家庭において子どもたちと生の声を介しての交流を行ってほしいという願いがあふれている。お母さんを応援する図書館という姿勢が示されている。

- ・ここ（＝読み聞かせのスペース、著者注）に子どもを預けて、という感覚ではなく、お母さんやお父さんが、子ども達のことを見て、子どもが何を感じているのか、どんな風に絵本を見ているのか、知って欲しいと思います「大垣市」

保護者も子どもとともにスペースの雰囲気を共有し、子ども理解の機会として利用してほしいと願っている様子が見えてくる。子ども理解の機会を提供する図書館という姿勢が示されている。

- ・図書館では、子どもが「おもしろい」「聞いてみよう」と関心をもってもらえるようにしています。家庭とは違う新たな世界を知ってもらおうきっかけにしたいです「大垣市」

図書館は家庭とは異なる新たな世界を知るきっかけを提供する場であるという意識がうかがえる。

子育て支援としての図書館の在り様として、お母さんを応援する図書館、子ども理解の機会を提供する図書館、家庭とは異なる新たな世界を知るきっかけを提供する図書館という姿勢が示されている。

## 2. 読み聞かせ活動の意義

「読み聞かせ活動の意義は何だと思いますか。」という質問に対して、各館の職員から回答を得た。

### (1) 「岐阜県」

職員 8 人、18 件の回答を得た。「図書館にとって、岐阜県子どもの読書活動推進計画<sup>1)</sup>に基づく読書活動の推進」という我が国の読書活動推進事業の一環であるという公共図書館の行政的な役割を踏まえた上で、読み聞かせ活動の意義について、主に以下の 4 点からの回答があった。

まず 1 点目は、「本と子どもを結ぶこと」「子どもと本を繋げる」ことである。読み聞かせの活動は、「肉声で届く言葉が聞き手の身体に響くこと」を通して、子どもと本をしっかりと結び付けてくれるからである。

2 点目は、絵本を介して親子のつながりができるということである。親子で絵本を楽しむ場として図書館は大切であり、「保護者にとって、わが子のお気に入りの一冊が見つかるきっかけ、親子で絵本を楽しむ場」となっている。「絵本の楽しさを親子に体験してもらい、親子のコミュニケーションのきっかけ」を作ってもらいたいと思う。そして、「絵本自体の楽しさと、読み聞かせをしてもらった幸せな記憶」が残り、「本を介しての親子の楽しい思い出」が、「これから子どもが生きていく上での力」となっていくだろう。親子の幸せな思い出は、子どもの生きる力を育ててくれると述べている。

3 点目に考えられるのは、子どもの言葉の力、思考力を育むことである。読み聞かせを通して、子どもの「表情・表現力を豊かにし」「想像力・思考を広げ」「物語をイメージする思考力」が養われ、「日常会話では出会わない言葉と出会い」、語彙が増え、「コミュニケーション」の力、さらには色彩感覚も培うことができる。

4 点目は、読み聞かせ活動は、「お母さんの居場所づくりという子育て支援の役割」も担っており、子育て支援のための母親の居場所として役立っていることに意義を感じる。

このように、子どもの読書活動推進事業という我が国の政策を受け止めながら、子

もと本とのかかわり、子どもの言語能力に与える影響、親子関係・親子のつながり、子育てを支える母親の居場所としてのほたらきなど、公共図書館における読み聞かせ活動の意義とその役割に関して、回答の内容は、幅広い多角的な観点に立ったものとなっている。

## (2)「大垣市」

職員1人、2件の回答を得た。読み聞かせに取り組む姿勢とかかわって、読み聞かせ活動の意義について次のように回答している。

読み聞かせ活動の意義は「おはなしの世界の心地良さ、楽しさ、おもしろさを知らせていくことで、自分からその世界を味わってみようと思ってくれるように導いていくこと」である。子どもとの時間を楽しむこと、お話の世界の楽しさ、心地よさを味わうことが何よりも大切なことで、「大人は子どもとの時間を楽しもうとすることです。読んでやる、教えてやろう等のかまちは禁物だと思っている」と語る。

「読み聞かせ」は、大人と子どもの心地よい時間を楽しむことであり、あまり「読んでやる」「教えてやろう」といった教育的な押しつけにならない点に配慮が向けられている。

## (3)「各務原市」

職員2人、2件の回答を得た。読み聞かせ活動の意義について、次のように述べている。

「絵本の世界を読み聞かせをすることによって楽しさ、感動を共有する楽しさ、伝える喜びがある」。「参加している親子のほほえましい姿を見ると、子育てなのだと思う。このことは、子供はもちろんだが、母親・父親にもいえることだと思う」。

このように、「感動を共有する楽しさ」や「参加している親子のほほえましい姿」といった、「読み聞かせ」が醸し出す「場の雰囲気」の細やかな情感の大切さに触れている。

## (4)「羽島市」

職員1人、1件の回答を得た。読み聞かせ活動の意義について、「本に親しみや興味を持ってもらい、図書館の利用につなげたい」と、職員の立場から、本に親しみ、図書館を利用してほしいという思いを語っている。



### 3. 参加者の変化とそれに伴う活動の変化

各図書館での読み聞かせが始まって20年以上が経過し、参加者の様子や活動内容に変化があると思われる。調査協力者の内、半数にあたる6人が10年以上読み聞かせの活動にかかわっており、その変化を直接感じていると考えられる。そこで次は、「読み聞かせ活動を続けてきて、子どもの様子や活動の内容に変化はありますか。それは、どのようなことですか。」と尋ねた結果を述べる。各館の職員12人から得られた計25件を回答内容に即して、「子どもの姿の変化」「子どもと読み聞かせをめぐる状況の変化」「活動の内容や方法、読み手の変化」「分からない」の4項目に整理して分析する。

#### (1) 子どもの姿の変化

子どもの姿の変化に関する回答は、6件あった。

- ・絵本を読み聞かせているだけでは、聞くことが難しくなっています。刺激を求めるようになってきていることからだろう「大垣市」
- ・何回も来て子供達が徐々に集団になれてお話を聞くのを楽しみに来てくれる「各務原市」
- ・子どもの様子に変化は感じていない「岐阜県」  
(同様の回答が「岐阜県」で計3件あった。)
- ・子どもは、今も昔もかわりません「各務原市」

子どもの姿の変化に関しては、絵本を集中して見たり、話を聞いたりすることが難しくなった現状が挙げられていた。前述したように、読む際は子どもの反応をよく見ることが目掛けられている。子どもたちの様子を見ながら読むなかで「刺激を求めるようになった」姿を捉え、その背景に多様なメディアに触れる機会の増加があると推察しているようだ。また、最初は途中で退屈する子どもも継続して参加することで、楽しむ姿に変わるという指摘もある。刺激を求める子どもも読み聞かせの魅力を知ること期待感が高まる姿が生じるといえよう。一方で、「子どもの姿に変化はない」という回答が4件ある。子どもは元よりお話を楽しむ存在だと考え、楽しむことが難しい背景には、次に示す子どもと読み聞かせをめぐる状況の変化があると考えていることが読み取れる。

#### (2) 子どもと読み聞かせをめぐる状況の変化

子どもと読み聞かせをめぐる状況の変化については、9件の回答が得られた。

- ・現在は、図書館のみならず学校でもどこでも読み聞かせが行われるようになり、読み聞かせが当たり前になってきたのだと思いました「各務原市」
- ・急速に（読み聞かせの機会が増え、著者注）読み聞かせをするのは良い変化に進

んで行っているとは思いますが「大垣市」

- ・保護者が、子どもと一緒に楽しもうという姿勢が薄くなってきたような印象「岐阜県」
- ・親のよみきかせとの関わり方が変わっていったと思います「各務原市」
- ・乳幼児向けのおはなし会にはたくさんのお親子が参加している「岐阜県」
- ・参加する子どもが低年齢化しています「大垣市」
- ・小学校中学年以上の大きい子の参加が減っている「岐阜県」  
(同様の回答が「岐阜県」で計2件あった。)
- ・参加するお父さんが少しずつ増えてきています「大垣市」

子どもと読み聞かせをめぐる状況の変化として挙げられたのは、社会的な読み聞かせの広まりと参加者の低年齢化であった。これは、主に21年以上読み聞かせに携わっている職員が挙げている。図書館に限らず、学校でもどこでも読み聞かせが実施されるようになった変化を捉え、読み聞かせが子どもたちにとって日常的な体験になっていることを指摘している。また、子ども連れで出掛ける場の少なさや孤独な育児の傾向があること、保護者が子どもと一緒に絵本を介して楽しむ意識の低下も感じ取っているようだ。参加する子どもは乳児期が多くなり低年齢化していることや、父親の参加が増えていることから、読み聞かせの場が子どもだけではなく、保護者にとって必要な場になっていると考えていることが読み取れる。一方で、以前は参加者の中心だった小学生の参加が減り、お話の世界を楽しむ経験が継続しないことへの懸念も指摘されていた。

### (3) 活動の内容や方法、読み手の変化

活動内容や読み手の変化に関する回答は、7件あった。

- ・月に2回では足りず、週1回に増やしました「大垣市」
- ・父親が育児休暇をとるようになり、お父さんにも来て欲しいという願いから、土曜日も追加しました「大垣市」
- ・絵本の読み聞かせを中心に考えているが、手遊び等を取り入れようとする方が一部出てきました。アレンジする余裕が読み手にも求められるようになってきました「大垣市」
- ・読み手も楽しくなれば、どんどんアレンジをしていきます「大垣市」
- ・絵本をメインにした時間から、歌や折り紙、工作など、様々な内容を楽しめる内容へと変化している「羽島市」
- ・何回か経験させて頂き、「読み手と聞き手が一緒に楽しむ事」を一番に考えるよ

うになってから、緊張することは少なくなりました。参加していらっしゃるお子様と親御様のご様子を把握できるようになりました「岐阜県」

- ・参加してくださる皆様と楽しい時間を共有させて頂ける喜びを味わいながら、引き続き読み聞かせ活動を続けていけたらと考えています「岐阜県」

活動の変化は、「(2) 子どもと読み聞かせをめぐる状況の変化」で述べた参加する子どもの年齢や状況の変化に関連した回答がほとんどであった。まず、「大垣市」では乳幼児の参加者の増加に伴い、乳幼児対象の読み聞かせの活動日が増加している。父親が育児休暇をとるようになった社会的な変化に伴い、土曜日の実施日も増えている。前述した「心がけていること」と「意義」でも、読み聞かせは子育て支援の一環という意識が見受けられたが、子育て支援の場として読み聞かせの機会を充実させようとする動きがあるといえる。内容についても、以前は絵本が中心だった読み聞かせが、「大垣市」と「羽島市」では手遊びや歌、折り紙、工作など多様化している。参加者の低年齢化と刺激を求める姿を受け、子どもがより興味を示す活動にしようと、絵本以外の素材も取り入れ、方法を模索されていることがうかがえる。そして、「岐阜県」と「大垣市」では、読み手が子どもと一緒に活動を楽しもうとする姿勢の変化にも注目している。両館は職員が読み手としてかわり、「心掛けていること」でも、「楽しむ姿勢」を挙げており、読み手としての心構えの変化についても実感していると考えられる。また、読み聞かせの経験が1年未満の回答者は、読み手と聞き手が一緒に楽しむ事を一番に考えるようになったことで、緊張感が減り子ども理解が深まったと述べている。読み手としての経験の積み重ねは楽しむ気持ちを生み、子どもの姿に応じた読み聞かせにつながっていくといえよう。

#### (4) 分からない

変化について「分からない」という回答は、3件あった。

- ・まだ、そこまで至っていない「岐阜県」
- ・正直わかりません「岐阜県」
- ・経験が短いため変化はわかりません「岐阜県」

3件中2件は、経験が1年未満の職員の回答である。数ヶ月の読み聞かせの体験では、社会的な状況はもちろん、子どもの姿にも顕著な変化がみられるとはいえない。長期にわたって継続することで、子どもにも読み手自身にも変化が生じるといえよう。

以上のように、子育ての孤立化や多様な刺激に溢れる子育て環境に伴って生じているであろう参加者の低年齢化や刺激を求める子どもの姿を捉え、図書館職員の読み聞かせ

活動に対する考え方も変化している。いかに図書館で子どもと保護者と一緒に読み聞かせを楽しむのかを考え、活動日の増加や内容の多様化を図っていることがうかがえた。

#### 4. 今後の課題

「読み聞かせの活動の、今後の課題は何だと思いますか」という質問に対し、4図書館の職員12人から得た回答を図書館別に整理し分析する。

「岐阜県」の回答を分類・整理すると、(1)読み聞かせボランティアとの関係、(2)保護者への支援、(3)伝える、広めるためのPR・広報、場の設定に分けられた。

(1)読み聞かせボランティアとの関係では、

- ・図書館で読み聞かせを行う際の共通認識の確認をするなど、ボランティアの方との協働であることの確認
- ・図書館に登録しているおはなしサポーター（ボランティア）の高齢化

という点を課題としている。これらのことから、新しい（若い）ボランティアの参加が少ない点を推察することが出来る。図書館職員は2・3年で入れ替わっていく。これに対し、長年ボランティアを続けている方は、要領等も分かっていてベテランであるが高齢化している。新しいボランティアの参加を通しての活性化及び図書館側とボランティアとの意思疎通の重要性の指摘から、より良い運営につなげたいという意識が読み取れる。

(2)保護者への支援では、

- ・読み聞かせの会に来ない保護者への、絵本の楽しみの啓発
- ・子どもに本を読ませるとよいと思っても、何を読ませたらよいのかわからない保護者への支援の方法
- ・ゆったりとした時間の中で読み聞かせの時間がつくれるといった親の（時間の）余裕

が課題だと言う。つまり、親の姿勢、親の興味関心に課題があると指摘する。これは、忙しい親、親が本を読んでいないのに子どもが本を読むようになるはずがないという考えも相俟って、時勢に対する意識でもあろう。図書館職員として、絵本（本）に親しんで貰いたいという願いが背景にあると捉えることができる。

(3)伝える、広めるためのPR・広報、場の設定では、

- ・PR方法
- ・広報の充実
- ・本の情報を必要としている人に情報を届ける方法

## ・場の設定

を課題に挙げている。本を読む場を提供する図書館としての使命に関する課題である。本の情報を必要としている人に図書館としてその情報を届けられていないことに責任を感じ、情報を届ける方法、PRの方法といった広報活動の充実を課題と考えている。また、読み聞かせの場の設定にも工夫を要するとしている。いずれも活性化に対する課題である。

以上の他に、小学校中学年以上の大きい子に参加してもらう工夫の必要性を課題とする意見もあった。読書推進という図書館の使命に関わる課題である。

「大垣市」の回答は、

- ・子どもさんの読書離れはなかなか手強いです。それには、絵本⇒読み物への導き方を保護者の方にお知らせしていくことだと思っています。読み物、調べ学習のおもしろさをもっとうまくアピールしていく事だと思っています
- ・お母さん達、お父さん達が穏やかになってもらえる場にすること。子育てに歌やおはなしを生かしてもらいたいです

であった。子どもの読書離れを危惧する意見は「岐阜県」職員にもあった。絵本から読み物（本）へ導いていく、また、読み物の面白さをアピールするという読書離れへの対処の仕方を提示している。読み聞かせを通して保護者も子どもと一緒に楽しむ場となるのだと、課題と読み聞かせの意義を重ねている。

「各務原市」の回答は、

- ・おはなし会を楽しんでもらうために良い本、新しい本や知らない絵本など出会う努力
- ・多くの本との出会いの場として活動をすることとおはなし会の質の向上

であった。この回答の共通点は、絵本（本）との出会いの場としての図書館の役割を読み聞かせの視点から捉えている点にある。

「羽島市」の回答は、

- ・読み聞かせスペースが狭く、場所の確保が課題です

であった。「羽島市」の読み聞かせはボランティアが担っており、その活動が円滑にいくよう場の提供者として見守る立場に徹している点が「羽島市」の特徴である。同図書館には交流を求めて集まる親子が多く、見学した折もスペースの狭さを感じた。そのため切実な環境整備に関わる課題である。場の設定については「岐阜県」も課題としていたが、「岐阜県」の場合は活動の運営をも含めたものであった。

以上、各図書館についてまとめた。「岐阜県」の職員は読み聞かせも担当している。

よって、読み手としての課題と絵本等を提供する司書としての課題の両方面からの課題を持っていたが、4図書館とも読み聞かせ活動の運営者の立場という点で共通した課題を提示していた。

#### IV. おわりに

以上、4図書館の職員のインタビュー調査から、「読み聞かせ」に関する図書館職員の考えをまとめてきた。以下、明らかになった点を示しておく。

- 「読み聞かせで心掛けていること」という質問に対する回答内容に即して3項目に整理し、分析した結果、次の3点を得た。(1)「読み聞かせ」の実践にあたってでは、事前の念入りの準備、実施時の読み手の技術面・心理面での意識がうかがえた。(2)「読み聞かせ」の環境づくりでは、スペースの雰囲気を読み手と共有し保持できるような穏やかで静かな環境づくりへの配慮がうかがえた。(3)子育て支援としての図書館では、お母さんを応援し、子ども理解の機会を提供し、家庭とは異なる新たな世界を知るきっかけを提供する図書館という姿勢が示されていた。
- 「読み聞かせ活動の意義」に関して、回答では、主に、子どもと本とのかかわり、子どもの言語能力に与える影響、親子関係・親子のつながり、子育てを支える母親の居場所としてのほたらきなどが取り上げられていた。全体的に見て、共通していた点は、「読み聞かせ」が醸し出す雰囲気や大人と子どもの心地よい時間を楽しむことに配慮が置かれ、あまり教育的な押しつけにならないことに気配りがされていることである。
- 「読み手が捉える参加者の変化とそれに伴う活動の変化」の回答からは、職員は子育て環境の変化に伴い、乳幼児期の子どもの参加が増加していることや、子どもが刺激を求めようになった姿を捉え、これまでのように絵本の読み聞かせ中心の活動を続けていくことの難しさを感じていることがうかがえた。読み聞かせの機会が多様にある社会のなかで、子どもと保護者と一緒に図書館での読み聞かせを楽しもうと活動内容や方法を模索している現状があるといえる。
- 「今後の課題」という質問の回答からは、図書館の行政的な役割との関連から、読み聞かせ活動の活性化を通してより良い絵本(本)との出会いを提供し、子育てや読書推進につなげていきたいと願っていることが分かった。

今後は、公共図書館における「読み聞かせ」に、読み手として携わるボランティアが読み聞かせ活動の意義をどのように捉え、何を心掛けて読み聞かせをしているのかを検討し、ボランティアからみた乳幼児期の読み聞かせについての考察を深めたい。

## 謝辞

本稿の前に「公共図書館における『読み聞かせ』に参加する乳幼児と保護者の実態」(岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要 第20号 令和3年2月刊)をまとめた。本稿はこれに続くものである。

調査にご協力くださった図書館職員の皆様、読み手としてご活躍されているボランティアの皆様、「読み聞かせ」に参加される保護者の皆様、子どもたちに心より感謝申し上げる次第である。

## 注・引用文献

- 1)ブックスタートは、0歳児健診などの機会に、行政と市民が連携して行う子育て支援活動である。子どもと保護者は、絵本をひらく楽しみを体験する。2020年12月31日現在は1066市町村で実施されている。  
(NPOブックスタート, <https://www.bookstart.or.jp/>, 2021年1月10日情報取得)
- 2)宮下孝広(2018):第10章 地域活動における読み聞かせが豊かな生涯発達を導く、田島信元、佐々木丈夫、宮下孝広、秋田喜代美(編)『歌と絵本が育む子どもの豊かな心ー歌いかけ・読み聞かせ子育てのすすめー』、ミネルヴァ書房、pp.263-264.
- 3)同上、pp.261-262.
- 4)横山真貴子・水野千具沙(2008):保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義ー5歳児クラスの読み聞かせ場面の観察からー、教育実践総合センター研究紀要、17巻、pp.41-51.
- 5)宮澤優弥(2017):読み手は学校における読み聞かせ活動をどう意義付けているか、読書科学、58(4)、pp.212-226.
- 6)糸井嘉・浜崎由紀(2019):読み聞かせにおける読み手の視線が聞き手の態度に与える影響についての考察、保育研究(平安女学院大学)、第49号、pp.41-48.
- 7)岐阜県では、平成16(2004)年3月に「岐阜県子どもの読書活動推進計画」を策定し、県が取り組むべきこと、市町村での取り組みを企画、これ以降、5年ごとに計画を改定しながら子どもの読書活動推進のための環境づくりを行っている。令和2年には、平成27年3月の第三次計画の策定から5年が経過したため、国の第四次「子供の読書活動推進に関する基本的な計画」等を踏まえ、新たな計画を立てている。「岐阜県子どもの読書活動推進計画(第四次)」(令和2年度～令和6年度)については、岐阜県のホームページ<https://www.pref.gifu.lg.jp/page/2083.html>を参照。また、国によ

る「子どもの読書活動推進」のための取り組みについては、文部科学省のホームページ参照。因みに、2018年の省再編により、公共図書館、学校図書館等は、文部科学省「総合教育政策局」（筆頭局）内の「地域学習推進課」の管轄となっている。この点からも、公共図書館等が文部行政においていかに重視されているかを伺い知ることができる。